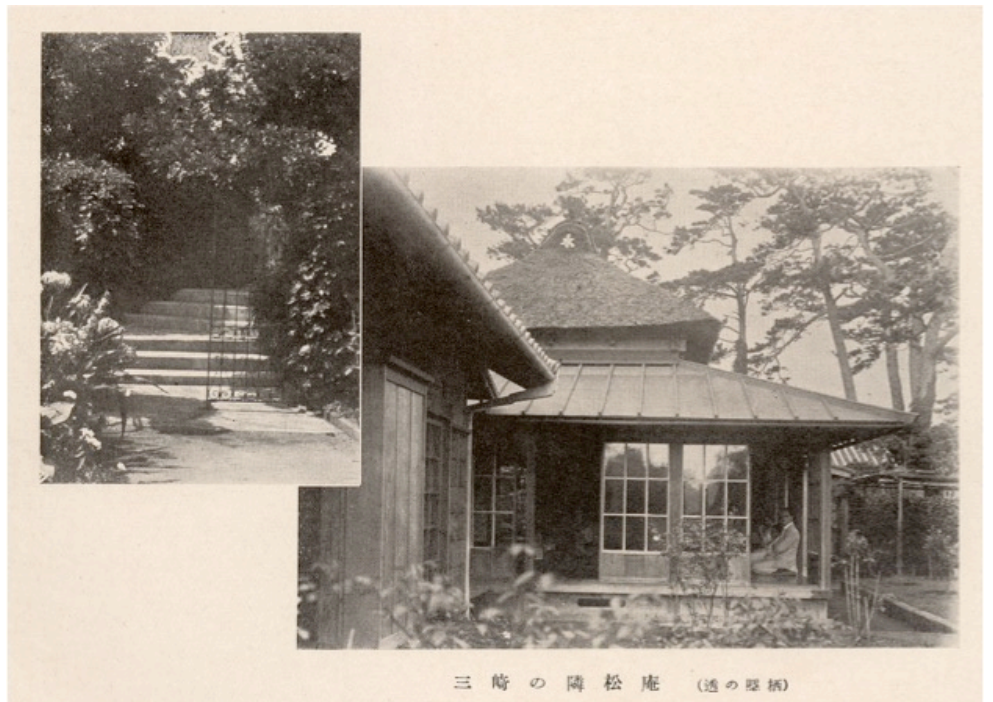


岩村透百回忌法要 記念講演会資料

2016 年 10 月 9 日 於本瑞寺本堂



岩村透肖像、1904 年頃



三崎の隣松庵 (透の隠所)

三崎の岩村別荘（隣松庵）1917 年 8 月 19 日 透の葬儀を翌日に控えて

三崎を愛した美術史家・岩村透——岩村文庫という遺産

東京大学大学院・教授 今橋 映子

はじめに

- 1 岩村透という人物
- 2 三崎との出会いと後半生
- 3 本瑞寺葬儀（1917年8月20日）の意味
- 4 没後十年忌記念「岩村文庫」——設立者坂井犀水と文庫主要作品について

1 岩村透という人物 1870年東京生—1917年三崎没 享年48歳

3つの横顔——〈明治大正期美術界の仕掛人〉

- 1 東京美術学校教授（1899–1916）＝西洋美術史家、美術教育者
『巴里之美術学生』（1902年）
『芸苑雑稿』（1906年）『芸苑雑稿第二集』（1913年） A、B
- 2 雑誌『美術新報』『美術週報』顧問＝美術ジャーナリズムの振興者
（第2期1909–1914）（1913–1916） 主幹＝坂井犀水 C、D
- 3 国民美術協会創立者（1913年）＝美術行政家
『美術と社会』（1915年） E

その主張と仕事——

- A ボヘミアンとしての芸術家の自立
- B 西欧美術の根幹、伝統の理解と系統樹的把握
- C ウィリアム・モリスの日本紹介者（社会主義と美術）
装飾美術運動の推進、若手世代の工芸刷新運動の助力
- D 西欧美術界の「現在」に関する網羅的情報収集と発信
- E 美術界の団結、行政に対する働きかけ、美術問題解決への努力
（例：美術家の経済問題、地方と美術、美術館の必要、趣味の向上、
文部省政策への批判、都市環境問題への提言・・・）

人柄—— 明朗闊達、悪口屋、誠実で義侠心に富む。建築と骨董が趣味。愛書家。
花を愛でる（俊、桔梗、芙蓉、百合子、綾女、楓、美俊、博、龍男）

銘 —— 「一念之誠可動天地」（本瑞寺境内銅像の碑名にも）

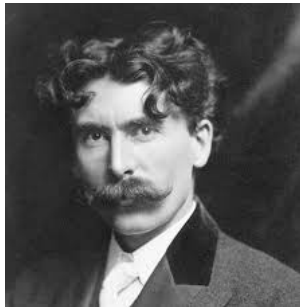
岩村透とは誰か



(1) 男爵家の長男、「いごっそう」の開拓精神

父祖
「岩村三兄弟」

岩村英俊
岩村通俊（男爵）—岩村蝦夷子
林有造
||
岩村高俊（男爵）—**岩村透**—岩村博



(2) 二言語使用の画家から美術批評家へ

アメリカ留学 (1888 年–1891 年)
パリ アカデミー・ジュリアン留学 (1891–1892 年)
*アーネスト・トンプソン・シートン 友人
(画家、『シートン動物記』著者)



(3) 「美校の三羽鳥」——美術界の牽引者

||

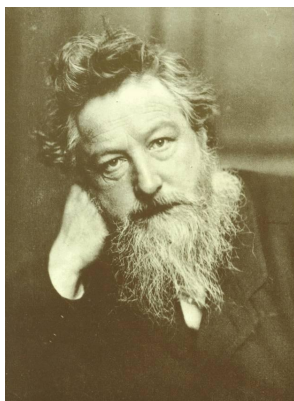
黒田清輝+久米桂一郎+岩村透

東京美術学校教授
白馬会会員
文部省展覧会審査委員



(4) 森鷗外の若き知友

- *美校、美術史講師の後任
- *『美術評論』同人
- *慶応大学文学部美術史教授（兼担）への推薦
- ◎小説「かのやうに」重要登場人物（綾小路秀麿）
- *国民美術協会設立の同志



(5) ウィリアム・モリスの美術思想の紹介者

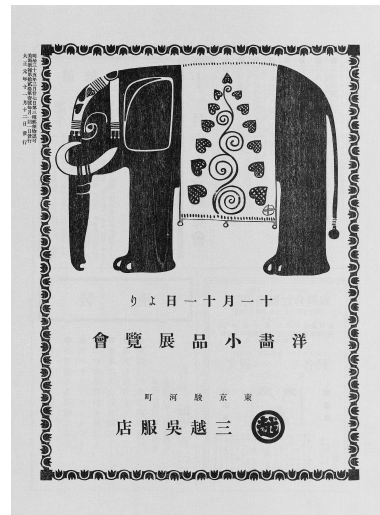
岩村透『美術と社会』1915 年
*雑誌『美術新報』で装飾美術運動を展開。
*1914 年 4–9 月欧米に外遊後、休職して
いた美校に復職を拒否され、1916 年に
満期退職。

(6) 国民美術協会の設立、牽引者

国民美術協会 (1913-1943 頃) : 美術団体。美術界の大同団結を旨とし、日本画、西洋画、彫刻、建築、装飾美術部、学芸部と美術ジャンルを超えて作家や批評家、ジャーナリストが結集した団体。黒田清輝、岩村透、森鷗外、中條精一郎などが主導した。

彼らは海外美術展の招聘、美術館設立運動、文展工芸部要請運動、美術家の権利保護など、公的な使命を帯びて活動した。岩村没後 10 年、1926 年に彼らの運動が実り、日本で初めての「現代美術」を扱う東京都美術館が開館した。その設計は、国民美術協会会員で建築家、岡田信一郎による。

岩村透 (とその仲間) の業績



デパートと美術販売

若手の小品展覧会 1911 年

『美術新報』の装飾美術運動



東京府美術館の建設推進運動
(現代美術の新興) 1926 年



都市環境問題への提言



【岩村透 主要参考文献】 (*＝現在入手可能なもの)

岩村透『芸苑雑稿他』(東洋文庫) 平凡社、1971 年＊
(「巴里の美術学生」『芸苑雑稿』『美術と社会』より抜粋)
清見陸郎『岩村透と近代美術』聖文閣、1937 年
野田宇太郎『近代文学における岩村透』私家版パンフ、1966 年
中村義一『近代日本美術の一側面』造形社、1976 年
酒井忠康「回想の岩村透」(初出 1985 年)『遠い太鼓』所収、小沢書店、1990 年＊
今橋映子『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房、1993 年／平凡社ライブラリー 2007 年＊
五十殿利治『観衆の成立』東京大学出版会、2008 年(第 1 章「岩村透と「公衆」」)＊
田辺徹『美術批評の先駆者、岩村透』藤原書店、2008 年＊

【今橋映子 岩村透関連著作】

(単著)『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房、1993 年／平凡社ライブラリー、2001 年
(共編著)『パリ一九〇〇年・日本人留学生の交遊——『パンテオン会雑誌』資料と研究』
ブリュッケ、2004 年
(展覧会監修)『パリ憧憬』展カタログ、高知県立文学館、2002 年
(第 8 部「土佐人のパリ——岩村透を中心に」)

【今橋映子 岩村透関連学術論文】

- ①「絵を描かぬ画家——岩村透『巴里の美術学生』新考」
(上記『異都憧憬 日本人のパリ』所収)
- ②「美術編輯者・坂井犀水の軌跡——初期社会主義運動と明治期美術界」
(『超域文化科学紀要』第 18 号、2013 年 11 月)
- ③「美術批評家・岩村透と初期社会主義——大逆事件下の「美術と社会」(上)」
(『思想』第 1081 号、岩波書店、2014 年 5 月)
- ④「美術批評家・岩村透と初期社会主義——大逆事件下の「美術と社会」(下)」
(『思想』第 1082 号、岩波書店、2014 年 6 月)
- ⑤「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井犀水——大逆事件とポスト印象派の時代に」
(『超域文化科学紀要』第 19 号、2014 年 11 月)
- ⑥「大正改元期の〈美術問題〉——美術批評家・岩村透と輿論形成の戦略」
(東大比較文学会『比較文学研究』第 100 号、すずさわ書店、2015 年 6 月)

#現在、『近代美術批評の成立と展開——岩村透とその時代』(単著)を執筆中

2 三崎との出会いと後半生 □cf. 『岩村透と三浦三崎』三浦市パンフレット

- ◇ 旅館 岬陽館 =明治44年(1911)大晦日 岩村透、友人たちと共に逗留。
- ◇ 1912年夏頃、三崎に別邸建設。隣松庵（現在の白石町二町谷、真福寺付近）
- ◆ 岩村透談「三崎にも家を建てているが、〔・・・〕それは藁葺きの丈夫な漁師の家の様なものにした。三崎を中心として三浦半島の南部沿岸は宛然南欧の趣がある。遠い南欧に行かずともすぐ近所に伊太利がある。特に私の家の回りにも柑橘類の樹木を植えて、大に南欧の趣を作らうと思ふ。」
(岩村透談「住宅問題その他」所収、『読売新聞』1911年7月21日)
- ◇大正2年(1913)夏「隣松庵観月会」を催す(雑誌関係者、美術界の友人)

- 1914年 外遊より帰国後、美校に復職を拒否される。1915年休職満期で退職。
- 1915年 美校事件。美校批判の急先鋒となる。1913年頃より糖尿病悪化。

◆岩村透筆、水谷鉄也宛書簡(年代不明)

「冬の三崎は又格別にて、晴天の日は〔華氏〕六十度を降り不申、黄金色の陽光に浴し候心地は真の極楽に御座候。ジェラニウムの花野天に咲き居り候を以ても、当地の暖かさの推察被致候事に御座候。・・・冬期の空気晴朗、晴天の日は箱根大山より天城の連峰手に取る如く相見え、富士の雪姿の明媚何とも申し難く候、大島の噴煙も明らかに眺め得申候、・・・椿の花は目下盛に咲き居り、メジロの囀声真に山中の感を起し申候・・・」

(坂井犀水「三崎と岩村先生」(10年忌記念講話梗概筆記)『みづゑ』
第260号、1926年10月、p.38)

3 本瑞寺葬儀(1917年8月20日)の意味

- ◇ 8月17日没 戒名 大透院殿玄心涯誠大居士
(第二十三代・玄中實參住職(1872-1955))

■黒田清輝日記(21日)――

「想へば岩村君ノ葬儀及墓所等ハ大ニ同君ノ遺志ニ叶ヒタルモノヽ如クニテ遺族ノ處置感服の至ナリ」

- ◇「葬儀も故人の遺言に従ひ、すべて土地の風を変ゆる事なしに行はれた。奇抜な竹筒の龍の首を先頭にして親族知己に至るまで皆一様に白蓮の造花を手にした行列は、海水浴の群衆に混み合ふ海浜の狭い路を縫つて桜の御所本瑞寺の石段を登り、本堂の前を三遍廻つたものである。会葬の黒田清輝氏は三崎の海浜を觀てブルターニュに似て居ると曰はれた〔・・・〕。」

(石井柏亭「岩村氏の葬儀に列して」『中央美術』1917年9月、p.69)

- ◇「〔棺前に〕「職人中」という札の付いた見事な根付きの高野槇一對と生花一對とが供えてあつた。それは先生が生前に愛撫せられた職人たちの謝恩の美しい供物であつた。特に高野槇は八人の職人が二里余りも隔つた所まで探し回つて買い求めて、一株を四人懸りで担いで來たのであつた。虚偽を憎み義理一遍の会葬者を避けようとせられた先生は、此の真情の籠もつた供物を如何に嬉しく受けられたらう。」

(坂井犀水「岩村先生終焉雜記四」『美術』第1巻11号、1917年9月、p.27)

◇黒田清輝談話

「岩村君の計に接して、此場合に一番先に来る事は、岩村君の逸事とか、事業とか云ふ事でなく、只自分と岩村君との間の交に就ての感覚と云ふ事が一番先に来る。それはどう云ふ感じであるかと云ふと、〔・・・〕吾々が若い間森の木のように枝を交へ、腕を組合して成長して行つて、どんな荒い風をも防ぎ合つて抵抗する、然るに一朝樵夫が来て其木の中で最もよく成長した大きなものから伐倒して行つて、中の弱いものが残つて行く。こうなつて見ればもう寒い風も骨を透して、到底嵐などに抵抗すべくもない、そしていつ吾々の番が来る様になるかと感じられた。と——」

(黒田清輝談「岩村透君を悼む」『美術』第1巻11号、1917年9月、p.18)

■「直接の告別は出来なかつたが、奥様に私への最後のお言伝は、「薔薇が今年はお名残に咲いて呉れて嬉しうございます」ということであつた。花を愛する私に取つては喜ばしい言伝であつて、又友情が溢れて居たと同時に、大往生に際して残された花の便りは、大悟の様もしのばれて美しい極みであつた。」

(坂井犀水「思ひ出づるまゝに」『岩村透男追憶集』所収、1933年8月、p.60)

4 没後十年忌記念「岩村文庫」——設立者坂井犀水と文庫主要作品について

1917年(大正6年)8月17日 逝去

1926年(大正15年)本瑞寺(三浦市三崎)にて10年忌法要 岩村文庫展 および岩村透男記念講演会
--

1930年(昭和5年)13回忌 本瑞寺に銅像建立(朝倉文夫作)

1933年(昭和8年)17回忌 『岩村透男追憶集』刊行

1936年(昭和11年)20回忌 (講演会基金を締める)

1937年(昭和12年)清見陸郎『岩村透と近代美術』刊行
(1940年 坂井犀水没)

1966年(昭和41年)50回忌 本瑞寺 記念講演会(野田宇太郎)

それで〔岩村〕先生は晩年美術行政の事に多く頭を用ゐられた、美術新報や、美術週報やに多く美術行政上の議論を發表せられたのであつた。(…)

此程(このほど)美術館、実は本当の美術館ではない、美術陳列館に過ぎないけれど、漸くあれ〔=東京府美術館〕が出来たに就ても、多年率先して美術館の建設を主張せられた先生を思はざるを得ないのである。(…)

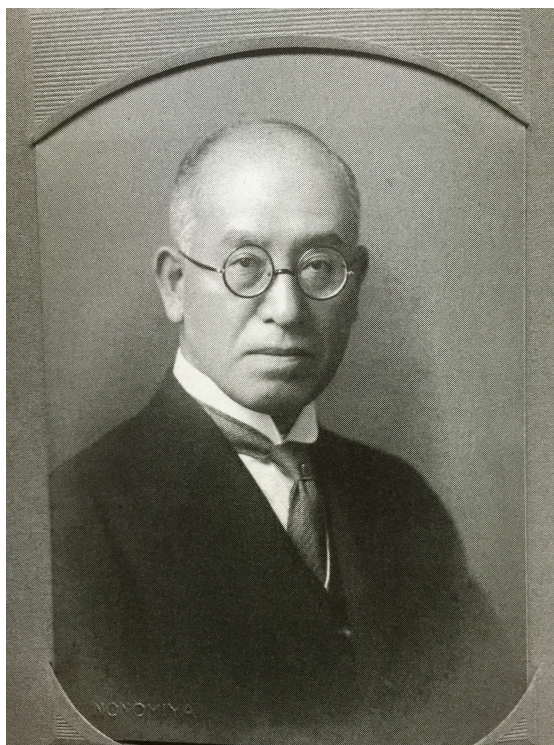
美術界の先覚者で大恩人である岩村透先生が、此三崎の地に桜の御所に永眠して居られる。此事を三崎の人々、三崎に来遊する人々広く天下の人々に記憶してお貰ひしたい。その記念の為に岩村文庫なるものを此の度創設して、縁故ある作家の作品の寄贈を受け、又智識の普及を希望して居られた故に、遺著を始め美術を中心として一般図書の寄贈を受けて、此岩村文庫を造り上げたいと思ふのである。大方の御賛襄を希ふ次第であります。

(坂井犀水「三崎と岩村先生」『みづゑ』第260号、1926年10月)

2016年(平成28年)10月9日 100回忌

本瑞寺岩村文庫の設立者 坂井犀水について

今橋 映子



西田孝司編『坂井犀水 著作目録』所収、非売品、2015年3月

美術評論二十五周年記念祝賀会の折に（1924年4月28日）

坂井犀水（本名・義三郎 1871-1940）は、金沢の生まれ。独学で美術や思想、宗教を学んだ。1891年24歳の折に、九鬼隆一の知遇を得て帝国博物館技手（臨時全国宝物取調局兼務）として、古美術調査に関わるようになる。その前後の若い日には、美術よりむしろ社会改良事業や慈善事業に深い関心を持ち、その道で立とうと努力した。その後、内村鑑三の主宰する雑誌『東京独立雑誌』の編集を出発点に、編集者としてのキャリアを歩み始める。『東京評論』『六合雑誌』『平民新聞』などに編集および執筆者として関わり、初期社会主義に深い関心をもった。

その後、社会変革の志を美術の世界で活かすことを岩村透から強く勧められる。『月刊スケッチ』『光風』『美術新報』『美術週報』『美術』など、多くの美術雑誌の編集長を務める。その優れた編集能力と、筋の通った穏やかな人格で、美術家たちの信頼を得、当代一流の美術ジャーナリストとして活躍した。犀水については、筆者の初の論考の後、石川県立博物館・西田孝司氏の書誌および伝記研究が公表されている。

坂井犀水は、美術を通した社会変革の志を（一歳年上の）岩村透と同じくし、互いに「同志」として敬愛した。諧謔と皮肉が時に誤解された岩村だが、その清廉な内面を生前から真に理解していたのは、犀水その人であった。透の没後、その再評価を心から祈念し、犀水は様々は事業を率先して行った。岩村記念美術連続講演会、銅像建立、追憶集発行、評伝（清見陸郎著）公刊など、枚挙に暇ない。本瑞寺岩村文庫の設立もその一環であり、犀水は当初、美術家たちの追悼作品に加え、美術文庫（図書室）の設立を望んでいたことが記録からわかる。

この度の百回忌法要および展覧会は、岩村の遺志を継いだ坂井犀水への追悼でもある。

今回の展覧会出品番号 14 坂井犀水、色紙、1926年

「岩村先生追悼 / 犀水 / 星落ちぬ / 夜を徹したる / 涼み甚」

*1913年8月、岩村は坂井犀水、黒田鵬心、田辺孝次などの『美術新報』編集同人で友人たちを三崎に一泊招待した。その折に揃いの甚兵衛で涼んだ懐かしい思い出を追悼句にしている。

展 覧 会 趣 旨

岩村透（1870–1917）は、東京美術学校（現在の東京芸術大学）の初代美術史教授であり、19–20 世紀の西欧美術史研究および美術批評の先駆的存在です。

その著書『巴里の美術学生』（1902 年）は、日本人の若き画家たちがパリへの憧憬を深めるきっかけとなり、永井荷風やパンの会の画家たちに直接的な影響を与えました。岩村は単に授業としての美術を教えるのではなく、いまだ洋画が日本に根付いていない時代に、画学生たちに西洋美術の最新情報を伝え、パリの美術家のような独立精神を鼓舞しました。

また同時に『美術新報』『美術週報』のような雑誌の編集と執筆を通して、政府や企業家たちに対しては美術の保護や美術行政のあり方を直接的に論ずる一方、社会一般の人々には美術の必要性や新しい美術のあり方を伝えていきました。美術教育、美術行政、美術報道——と、多面にわたるその活動から、岩村透は、あたかも「明治大正期美術界の仕掛け人」と呼べるほどです。

晩年、思想統制をしようとする美校と衝突し、同時に糖尿病という不治の病で 48 歳で夭折したために、現代では忘れられた存在ですが、生前は、洋画家・黒田清輝、久米桂一郎とともに「美校の三羽鳥」と呼ばれた名物教授であり、森鷗外が盟友としてその姿を小説に遺すほど、重要な存在でした。黒田清輝は彼の死を悼んで、あたかも自分たち仲間の中の最も高い木が、ある日急に伐採されたかのような喪失感である——と述べています。

三浦市三崎の本瑞寺は、岩村透の菩提寺です。岩村はその晩年、病を癒やすために偶然訪れた三浦半島の美しさに惹かれ、「あたかも南イタリアにいるかのような」風情を愛して別荘を建て、ついにそこが終焉の地となりました。その病没後、彼の死を惜しんだ友人、美術家仲間たちは十年忌、十三回忌、十七回忌、二十回忌、五十回忌と、ことあるごとに三崎の本瑞寺に集って法要を営むと共に、銅像建立や記念講演会の開催、評伝の刊行、追憶集の刊行など、様々な行事を行ってその遺徳を偲んできました。

2016 年 8 月 17 日は、岩村透百回忌にあたり、五十回忌以来半世紀の間行われることの無かった法要を執り行うこととなりました。実は本瑞寺には、十年忌の折に盟友坂井犀水の奔走によって、当時名のある画家や彫刻家たちが、岩村透の追悼のために奉納した作品群（名称「岩村文庫」）が遺されています。その実態と意義が私たちの調査によって、ようやく明らかになってきました。

今回の百回忌法要では特別に、その岩村文庫からの名品を陳列する一日展覧会を開きます。同時に関連する記念講演会を催して、「岩村透と三崎」の深い御縁についても、改めて皆さんにお知らせしたいと思います。展覧会では岩村の原稿、書簡、著書、雑誌など関連資料も展覧いたします。

現在、身近な生活に美術が寄り添い、美術館でも画廊でも、テレビでも新聞でも、国内外の豊かな美術作品に触れることができる私たちの暮らしは、百年前の岩村透とその仲間たちの深い学識と熱意ある運動——美術館設立、美術ジャーナリズムの確立、芸術家の権利擁護など——に拠るところが少なくありません。その岩村の晩年の生活に彩りを添えた三浦半島に感謝を捧げつつ、関係の方々に岩村文庫の特別展をご覧頂きます。今、改めて岩村透の業績と、彼を慕って追悼を捧げた美術家たちの思いを振り返るよすがにして頂ければ、これに過ぐる幸せはありません。

2016 年 10 月 9 日

監修者 今橋映子
今橋理子

展示作品リスト

*展示番号は、右頁の展示室見取り図中の番号と対応

- 0 岩村透肖像写真（複製）1904年頃(34歳頃)
- 2 岩村透著書（今橋映子蔵）
『巴里の美術学生——外ニ美術談二』（筆名＝芋洗生）画報社、1902年
『芸苑雑稿 初集』画報社、1906年
『芸苑雑稿 二集』画報社、1913年
『美術と社会』趣味之友社、1915年
- 3 初期の岩村透研究（今橋映子蔵）
岩村博編『岩村透男追憶集』私家版、1933年（17回忌記念）
清見陸郎『岩村透と近代美術』聖文閣、1937年（20回忌記念）
野田宇太郎『近代文学に於ける岩村透』私家版パンフレット、1966年（50回忌記念）

宮川寅雄編著『芸苑雑稿他』平凡社（東洋文庫）、1971年 #唯一の岩村透選集
中村義一『近代日本美術の側面——近代洋画とイギリス美術』造形社、1976年
- 4 岩村透が主筆であった美術雑誌（今橋映子蔵）
『美術新報』画報社、1902年3月—1920年12月、全20巻、298号
『美術週報』美術週報社、1913年10月—1917年2月、全4巻、139号

【参考出品】

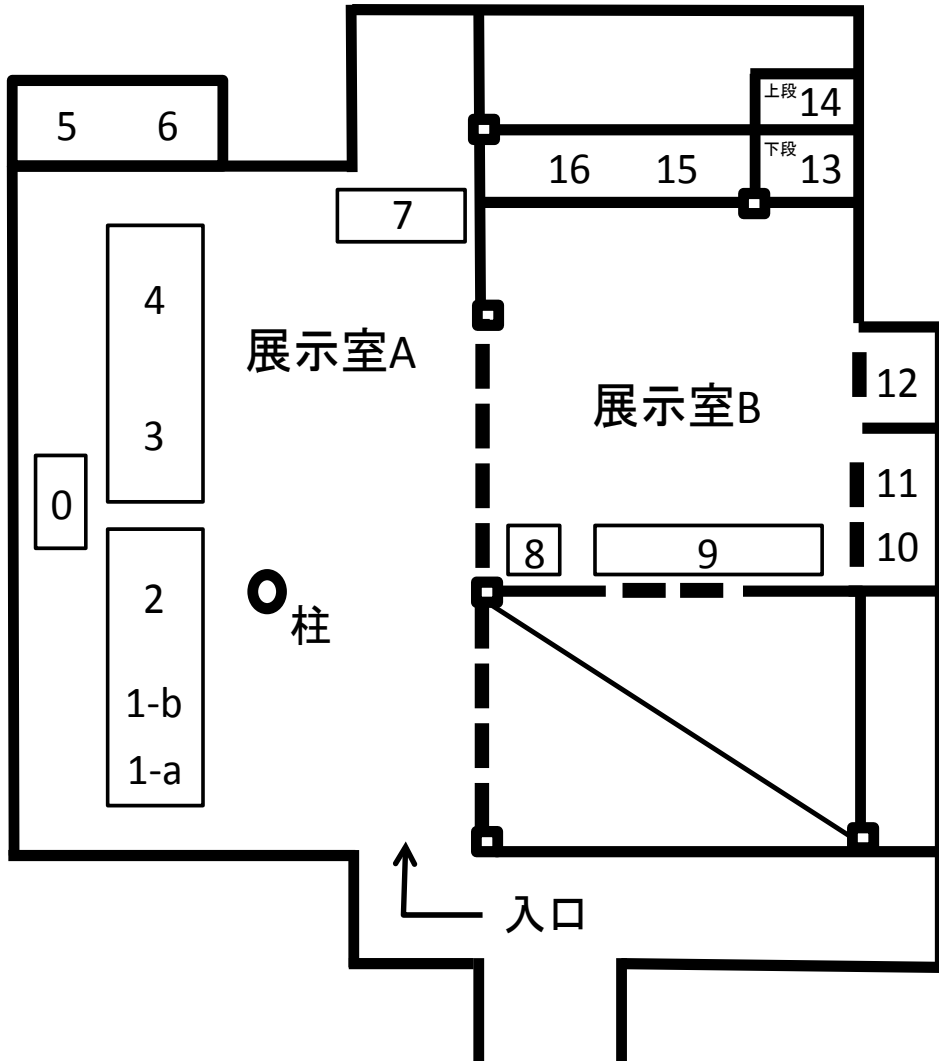
- 5 黒田清輝《小舟》（写真複製）原図は板・油彩 23.5×29.7 cm 1894年 個人蔵
- 6 作者不詳（朝倉文夫か）《仔犬》ブロンズ 制作年不明 本瑞寺蔵
- 7 朝倉文夫関係（岩村透銅像建立関係書類、朝倉彫塑館岩村文庫写真）
- 8 小糸源太郎《パンジー》キャンバス・油彩 制作年不明 本瑞寺蔵

【岩村文庫（神奈川県・本瑞寺蔵）】

- 1- a 《故岩村男爵十年忌講話会並展観》布製ポスター 油彩 57.0×37.5 cm 1926年
- 1- b 《故岩村男爵十年忌講話会並展観》布製ポスター 油彩 57.5×37.6 cm 1926年
- 9 《観堂十年忌》画帖 および帙 20.7×16.8 cm 1926年
- 10 石井柏亭《栗》紙本墨画淡彩 112.0×30.4 cm 1926年8月以前
- 11 九鬼隆一《達磨》紙本墨画 139.0×26.7 cm 1926年8月以前
- 12 朝倉文夫《梅》紙本墨画 134.5×33.2 cm 1926年8月以前
- 13 水谷鉄也《達磨》鋳銅 台座奥行21.5×横幅27.2 cm 1926年8月以前
- 14 坂井犀水《岩村先生追憶・・・》色紙 21.0×18.2 cm 1926年8月以前
- 15 富本憲吉《きたのくに》香合 横10 cm 1912年頃（坂井犀水寄贈）
- 16 藤島武二《観音図》紙本墨画 137.7×39.0 cm 1926年

展示室見取り図

* 番号は、左頁の作品リスト番号と対応



主要作品・主要作家紹介

(番号は、展示作品リストと対応しています)

2 『巴里の美術学生』(画報社、1902 年)

若い日の岩村透の代表作。これを読んで木下杢太郎や永井荷風など、若き画学生たちはパリに憧れたと言う。当時は「贈り物にも最適」と売り出されたベストセラーだったが、何故か現在に遺存する本がほとんど無く、稀覯本である。

完本は、今回の出品ともう一点しか現存していない。

3 野田宇太郎『近代文学に於ける岩村透』(私家版、1966 年)

岩村透 50 回忌の折に、特別配布された講演会パンフレット。

野田宇太郎(1909-1984)は詩人、文学史家、文芸誌編集長。明治村設立の尽力者としても知られる。野田は〈パンの会〉を含む明治文学史を研究する中で、岩村透の存在を知り、その重要性を早くから説いた人物である。

5 黒田清輝《小舟》(今回の展示品は複製写真) 1894 年

黒田清輝(1866-1924)は、岩村透の友人、美校の同僚教授、そして美術行政における同志のような存在であった。黒田は岩村の死をことのほか悼み、その葬儀に出席した数少ない友人の一人である。この作品はおそらく生前の岩村に黒田から贈られた油彩の小品で、黒田作品としては長らく行方不明とされてきたが、今回の調査で再度発見された。

7 朝倉文夫(1883-1964) 近代日本の彫塑・彫刻家。岩村透を師として仰ぎ、生前の岩村に様々な教示を受けた。また同時に、岩村透が最晩年に奮闘して発行した『美術週報』坂井犀水主宰の『美術』などの雑誌の出資者として、師の事業を助けた。岩村の死の直後、売却されかかった師の愛書(洋書約 1700 冊等)を救出して買い取ったのも朝倉である。その洋書は「岩村(旧蔵書)文庫」として、そのための書棚まで誂えて大切に保存された。現在、台東区・朝倉彫塑館に、展示されている。

本瑞寺岩村文庫には、朝倉の墨画「梅」が遺る。また 17 回忌の折には朝倉文夫作の岩村透胸像が造られ、現在に至っている。今回はその設立寄付金募集関係の書類も展示する。

9 《観堂十年忌》画帖、1926 年

岩村透十年忌の折に、国民美術協会会員たちによって制作された画帖。同協会会長で建築家の中條精一郎が寄贈した。黒田清輝没後 2 年目にあたり、黒田の参加は無い。十年忌当日の記録も記されており、十年忌法要参加者や展覧会の様子がわかる。

中條精一郎(1868-1936)は、建築家の社会における地位向上のために尽くした人物であり、岩村透と思想を同じくした。

15 富本憲吉《きたのくに》1912 年頃

富本憲吉(1886-1963)は、陶芸家。人間国宝の第一号。日本におけるウィリアム・モリス紹介者の一人でもあり、その論考は雑誌『美術新報』に掲載された。ただし富本は国民美術協会会員でなく、岩村とは距離を置いていた人物である。一方で坂井犀水を美術編集者として尊重しており、この作品も犀水が岩村文庫に寄贈した。富本が陶芸に手を染めた最初期の楽焼きで大変珍しく、これまで富本研究でも知られていない作品である。

16 藤島武二《観音図》1926 年

藤島武二(1867-1943)は近代日本の代表的洋画家。岩村とは美校同僚教授で友人。藤島は経済的理由もあって、生前は日本画を多く描いていたという証言があるが、後代の藤島研究では作品リストから日本画を省いている。実際遺存作も少ない現在、この観音図は貴重な作品である。「為岩村透君追善 丙寅 [=1926 年] 夏日 武二写」という款記があり、ひたすら十年忌の追善のために描かれ奉納された作品であることがわかる。この度は百年忌法要の意を込めて、特別に公開する。

岩村透百回忌法要 本瑞寺所蔵岩村文庫展覧会

2016 年 10 月 9 日（日）

神奈川県三浦市三崎 海光山本瑞寺

法要施主 岡添正
住職 洞外文隆

【展覧会監修】

今橋映子（東京大学大学院教授）、今橋理子（学習女子大学教授）

【本パンフレット監修】

今橋映子

【展示協力】

高木亜希子、堀江秀史、松枝佳奈、町田樹、西田桐子、李範根、森松亜依

【調査報告・研究論文】

今橋映子「岩村没後十年忌（1926 年）本瑞寺所蔵追善作品群の意味」
（科学研究費補助金 2016 年度報告書、2016 年 10 月 9 日）
（翻字部分担当：永井久美子[東京大学大学院助教]）

【謝辞】

この度の展覧会にご協力くださった下記の皆様に心から御礼申し上げます。

海光山本瑞寺（洞外文隆、洞外しげ子、洞外文敬）
岩村和俊、朝倉彫塑館（戸張泰子）
敬称略

岩村透百回忌法要 本瑞寺所蔵岩村文庫展覧会



十年忌展 布製ポスター (1926 年)

2016 年 10 月 9 日 (日)

神奈川県三浦市三崎 海光山本瑞寺